

第3章 考 察

本遺跡から検出された遺構・遺物の総数は少ない。そのため、各時期の遺構の変遷については、改めて述べるまでもないと考えている。そこで、本章では特徴的な遺構・遺物について若干の考察を加えて、本遺跡の調査成果のまとめにかえたい。

1 円形を呈する土坑について

調査Ⅰ区東部では8・14・18・19・33号土坑のように、円形を呈し平面規模が大きく深い土坑が集中している。これらの土坑は、平面形や土層の堆積状況に類似性が認められ、同様の性格を有すると推察されるが、遺構に伴う遺物が出土していないため、厳密な意味での所属時期は不明である。また、遺物が出土していない場合、土層の堆積状況を比較検討し、遺跡内での遺構の所属時期をある程度推測することがしばしば行なわれているが、本遺跡内では、これらの円形を呈する土坑以外で、似たような堆積状況を示す時期が特定できる遺構例がないため、比較検討資料に乏しい。ただ、福島県内において、このような形態・規模の土坑で、本遺跡のように①集中して分布する、②周囲に住居跡が認められない、③出土遺物がほとんどない、という特徴を示すものは、縄文時代と古墳時代の類例を確認している。

縄文時代の資料では、郡山市仁井町・上納豆内遺跡（鈴木他1982）やいわき市タタラ山遺跡（今野他1996）などで確認されている、円形土坑と呼称される縄文時代中期頃の貯蔵穴がある。縄文時代中期末葉の集落構成については、貯蔵穴の用途を持つ土坑の構築域と居住域とは、分離して存在する傾向があることが指摘されている（鈴鹿他1990、本間他1990、井1996）。そして、縄文時代の円形土坑では、タタラ山遺跡や郡山市堂後遺跡（高田他1989）のように居住域と分布を異にする場合は、遺物がほとんど出ない場合がある。本遺跡の円形を呈する土坑群の在り方は、このような状況ともみられる。なお、住居跡群が存在する場合は、調査区外でも北側の段丘面上にあると推測され、これは後述する古墳時代の類例でも同様と考えている。

古墳時代の遺跡で検出されている、この種の円形を呈する土坑も、用途は貯蔵穴と考えられている。しかし、古墳時代においては、郡山市東山田遺跡（嶋原他1996）、矢吹町白山A遺跡（藤谷他1999）、東村佐平林遺跡Ⅷ区（大越1980）、天栄村舞台遺跡（玉川1981）や山崎遺跡（香川他1990）などにみられるように、古墳時代中期・後期の各住居跡に近接して1～3個の土坑がセットとして検出されるのが一般的である。そしてセットとして考えられる根拠として、これらの土坑からは住居跡とほぼ同時期の土師器片が出土している。一方、佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区（目黒1978）では、住居跡群と離れた位置に集中して構築されており、遺物も出土していない。このような在り方から、本遺跡例あるいは資料が古墳時代のものであれば、佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区のような状況といえる。ただ、上述

した①～③の特徴を示すものは、管見では現在のところ佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区しか確認していない。

以上のように、本遺跡の円形を呈する土坑群は、1つの可能性として縄文時代あるいは古墳時代のものであることを指摘したが、やはり住居跡や遺物が検出されない状況で時期を推測するのは困難であり、かつ危険でもある。しかし、住居跡や遺物が検出されないからといって時期や性格が不明とするだけでは、その遺構・遺跡の評価はそれで終わってしまう。したがって、上述したように可能性を指摘することはあながち無意味なことではないと考えている。今回は縄文時代と古墳時代に限って検討を試みたが、他の時期の異なる性格のものであることも充分考えられる。この種の土坑については類例を調べ、今後さらに検討していきたい。

2 1号溝跡について

1号溝跡は東西に伸びる段丘面上に立地する。この段丘面は東側に行くにしたがって幅が狭くなっており、1号溝跡はその端部を南北に切断するような形で構築されている(図41)。このように、段丘面が伸びる方向と直交して溝が構築されている例としては、鹿島町中館・浪江町権現堂城・植葉町井出城などの堀切跡(小林他1988)が挙げられる。また、断面形は薬研堀を呈し、規模は

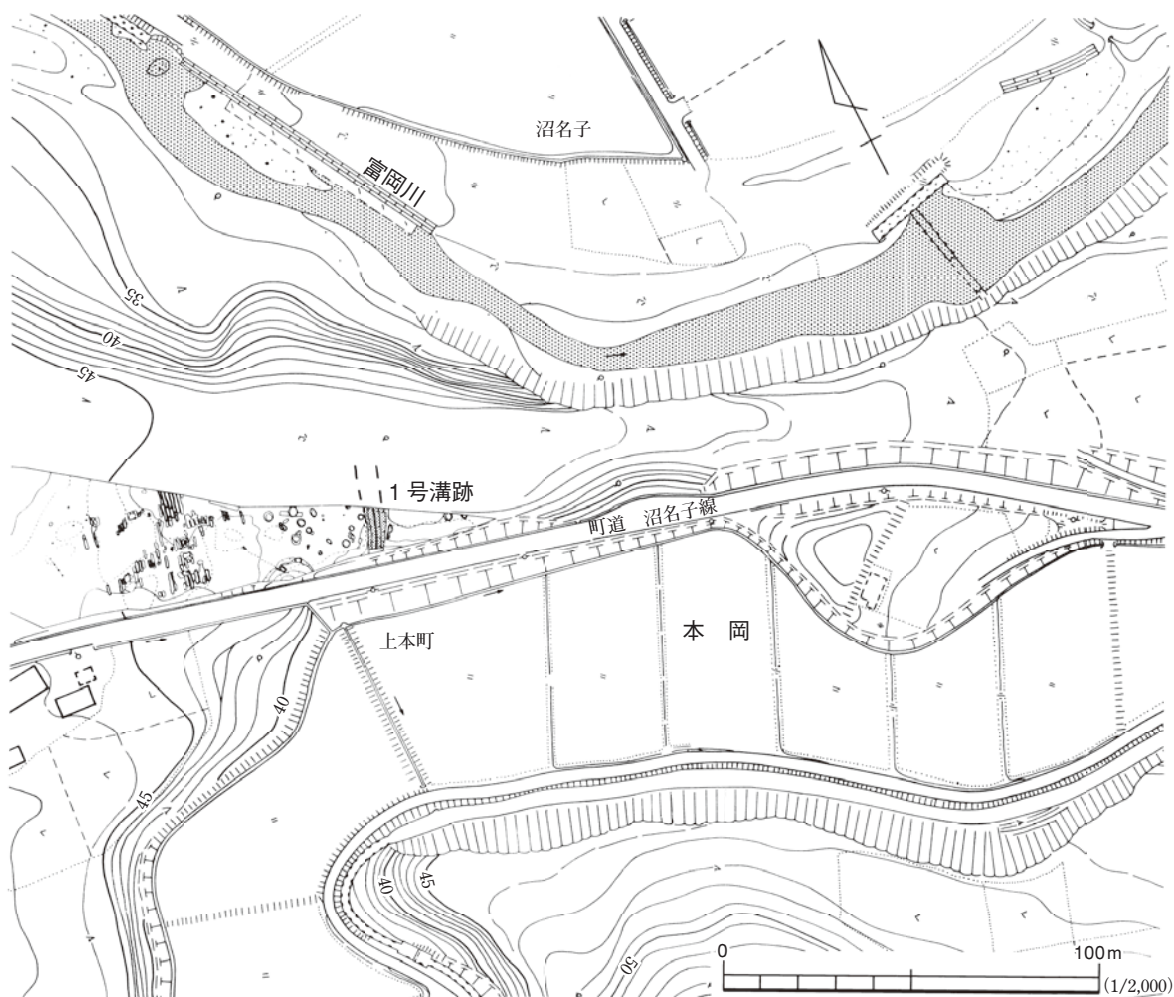


図41 1号溝跡と周辺の地形